

【論文】

杜牧「山行」詩の「坐」について

On 坐 zuo in the poem “山行 Shan xing” by 杜牧 Du Mu

高橋 未来

Key words ; 杜牧 「山行」 坐 訓読

前言

杜牧（803-852、字は牧之）の七絶「山行」（『樊川外集』所収）は、『三体詩』に収められ、日本でも古くから人口に膾炙した詩のひとつである。ただ、第三句の「停車坐愛楓林晩」の「坐」をどう解するかについては、これまでも議論がなされてきた¹。

日本では室町の『三体詩』の抄物以来、「坐」を「自ずと」、「何とはなしに」という意味の「そぞろ」または「すずろ」と訓じて「車を停めて、何となく暮れ方の楓樹に心を奪われた」といった意味に解することが慣習となってきた。しかし近年刊行された個々の注釈書を見ると、訓読は「そぞろに」というものの、実際には、たとえば「何ということもなく車をとめて美景を味わった²」という、「坐」を「停車」にかけたような解釈の他、「眺めあかぬ³」「のんびりと⁴」「そのままうっとりと⁵」「しみじみと⁶」「われ知らずじっと見入る⁷」といった多様な解釈が見られる⁸。それは、「坐」を「何とはなしに」と訳して「愛する（愛でる・観賞する）」にかけるとしっくりしないので、苦心した結果と思われる。

一方、中国では、張相『詩詞曲語辞滙釈』（中華書局、1953。以下『滙釈』と称する）「坐」の項に（一）から（九）までの意味を収め、その（九）「猶因也；為也（因る、ためである）」の例に「山行」を挙げて、「言為愛看紅葉而停車也（紅葉を愛でるために車を停めるという）」と解説した。以来、今日に至るまで「坐」を「因る」、つまり車を停めたことの原因を意味する前置詞と捉えるのが主流となっている。しかし最近では、日本の注釈書にも「坐」を「因る」とする解釈が見られ、その一方で中国刊行の論文には、「因る」以外の「すわったままで」、「座禅して」との解釈や、『滙釈』「坐」（六）に「甚辞、猶深也；殊也（甚だしいという意味のことば、深く、殊に）」とあることから「深く」、「殊に」との解釈も見られるようになり、今はちょうど解釈の分岐点にさしかかったという観がある。

そこで小稿では、諸説を整理した上で、「山行」詩の「坐」の意味を再検討してみたい。

1. 「山行」

(1) 「山行」

まず、「山行」の一詩全体は次のようである⁹。問題の第三句は、便宜上読み下さずに原文を示すこととする。

山行

遠上寒山石径斜　遠く寒山に上れば　石径　斜めなり
 白雲生処有人家　白雲生ずる処　人家　有り
 停車坐愛楓林晩　停車坐愛楓林晩
 霜葉紅於二月花　霜葉は二月の花よりも紅なり

「山行」とは、山辺のそぞろ歩きをいう。第一句は、秋のものの寂しい山をどこまでも登りゆけば、石ころの多い道が斜めに続いている、という。第二句、あの白雲が湧くあたりにも人の住む家があるといい、少し意外な発見といった気分がある。「白雲」の語は、俗世を離れた高雅な世界を象徴し、「人家」とは隠者の住みかのようなものである。

第三句の「愛」は愛でて観賞すること、「楓林」の「楓」とは日本のカエデとは異なる、マンサク科落葉高木の楓樹のこと、ただしここでは、紅葉した木々を総称しているのであろう¹⁰。「晩」は暮れ方、「楓林晩」は楓樹の林が夕陽に照らされて輝く光景である。「坐」を「そぞろに」と解すれば、「車を止めて何となく、楓の紅葉した日暮れの風景に見とれている¹¹」、「因る」と解すれば「車を停めたのは暮れ方の楓樹を愛でるためである」との意味となる。第四句は、霜に染まって真っ赤な楓樹の葉は、春の盛りの花にもまして赤く美しく輝いている、という。第三句の「楓林」という林の光景から第四句の「霜葉」へのクローズアップによって、視点は一挙にフォーカスされ、秋のものの寂しい日暮れ時にも強く輝く美を発見してはっとさせられたこの第四句に一詩全体が収斂する。いわば山を登り始める第一句から三句までは、この第四句のためにあるといっていよう。

(2) 詩話の評

次に、「山行」に関する詩話類の評を見ていきたい。

「山行」について、たとえば明・瞿佑『婦田詩話』上「先入之言為主」の条には「写景詠物妙（写景詠物の妙）」と称し、清・范大士『歴代詩發』卷二十二には「結句写得秋光絢爛（結句は秋光の絢爛たるを写し得たり）」と称するように、絵画的構図と景物描写の美しさ、第四句の表現の美しさを評されることは多いが、「坐」についての言及は見えない。ただ、『唐三体詩』の清・何焯の評は次のようにいう。

「白雲」即是炊煙、已起「晩」字。「白」「紅」二字、又相映發、有逕則有人、字字相生。「有人家」三字、下反接「停車」、「愛」字方有力。

「白雲」は即ち是れ炊煙なり、已に「晩」の字を起こす。「白」「紅」の二字も、又た相映發し、逕有れば則ち人有り、字字相相生ず。「有人家」の三字、下に反つて「停車」、「愛」字に接して方めて力有り。

詩中の「白雲」を炊煙と見なすのは興味深い。「有人家」の三字が、後の「停車」と「愛」の字にいたって生きてくるというのは、人家があるから立ち寄るために車を停めたとの意味であろう。つまり人家を見つけて車を停めたところ、その庭にあった楓樹に見とれたと解するようである。

また、清・王文濡『唐詩評注読本』卷四には次のようにいう。

至白雲深处、因有人家、故偶然停車小憩、坐看楓葉、嫣然可愛、較之二月花、更覺紅艷、成絕好一幅秋景図、所謂詩中有画者は也（傍点筆者、以下同じ）。

白雲の深き処に至れば、人家有るに因るが故に偶然にして車を停めて小しく憩い、坐して楓葉を見れば、嫣然として愛すべく、之を二月の花に較ぶるも、更に紅艷なるを覚え、絶好の一幅の秋景図を成す、詩中に画有りと謂う所の者は是なり。

白雲の深いところに辿り着くと人家があるので、図らずも車を止めて少しく休息し、すわって楓樹の葉を眺めた。それは艶やかで愛くるしく、これを春真っ盛りの二月の花に比べても、さらに紅く艶やかであり、一幅の秋の風景図であった、いわゆる「詩中に画有り」（蘇軾）というものだ、という。

王文濡も何焯と同じく、思いがけないところに人家があったので車を停めたと解しており、楓樹を觀賞するために停車したのではない。そして「坐愛」は「坐看楓葉」、つまりすわって楓樹の葉を觀賞すると解するようである。

（3）後人の詩に詠まれた「山行」

次に、後人が「坐」を如何に解釈したかを検討するために、「山行」を典故に用いた詩を見ていきたい。

「坐」を「深く」の意味と説く王建勇「“停車坐愛楓林晚”的“坐”」（『漢字文化』2014年第5期）は（本稿第4節に後述）、「坐」を「因る」とする説には、明清の詩人による解釈が関係するという。それは次のような詩に窺われる。

○明・張鳳翼「題停車図」「莫怪山中少推轂、停車元是愛楓林。」

○明・釈大経「秋晚歴游台山」「平田風日自悠悠、為愛楓林結勝游。」

○明・孫鑛「曉度七里峽」「為愛楓林色、停鞭憩短亭。」

○清・彭啓豊「過楓岩禪院」「穠華那待三春景、為愛楓林棹再停。」

王氏は、この四首の作者はみな、「坐愛」を「愛するために」、つまり楓樹を愛でるために停車したと解釈しており、それが張相『滙釈』以後の「因る」説に影響したと論じる。それに続けて、王氏は「坐」を副詞の「深く」「殊に」の意味と解して「楓林を深く愛する」と詠じた詩数首を挙げる。

○明・蔡羽「諸友次高座寺」「醉愛楓林暮、停車傍狹斜。」

○清・于鶴「秋晚池上独坐」「最愛楓林高百尺、無端落葉自琳琅。」

○清・查嗣瑤「補屋秋色索初白和」「樊川莫愛楓林晚、來看農家葉葉霜。」

○清・錢陳群「為徐上復水部題小影兼送之任留都」「閑情写作山居服、最愛楓林欲晚時。」

○清・乾隆帝「出塞雜詠九首」其五「最愛楓林新似染、折來題句手親書。」

この五首の「愛」は觀賞するという意味よりも、好む、愛するとの意味に近いようである。蔡羽の詩の「醉愛」についても、王氏は「最愛」の意味と解説している。

その他にも、筆者の気がついた詩に、次のような詩がある。

○明・謝遷「疊前韻酬雪湖」「坐向楓林真愛晚、臥当圭竇漫看雲。」

○明・王夫之「讀甘蔗生遺興詩次韻而和之七十六首」其十七「也知秋葉如鵝血、愛此楓林一夜霜。」

○清・錢琦「同顒齋嵩崧霞皋亭看紅葉即事」「愛茲楓林葉、冷挹霜華飽。」

○清・賴世觀「賦得霜葉紅于二月花得霜字」「停車堪坐愛、疏影異群芳。」

○清・許南英「柳梢青 游閩嶺」「浮嵐積翠、楓林坐晚、停車還愛。」

謝遷は「坐して楓林に向かいては真に晩を愛し、臥して圭竇に当たりては漫ろに雲を見る」、賴世觀は「車を停めて坐して愛するに堪う、疏影 群芳に異なれり」、許南英は「浮嵐 積翠、楓林 晩に坐し、車を停めて還た愛す」と詠じており、「坐」は動詞のすわるという意味のようである。以上の詩では、「山行」の「停車坐愛楓林晩」を①楓樹を觀賞するために車を停める、②楓樹を深く愛する、③車を止め、すわって楓樹を觀賞する——というおよそ三つの意味で詠じている。ただ、「坐」自体を原因の意味または「深く」の意味で詠じる詩は見えない。この点は留意するべきである。

2. 因る・ために

(1) 歴史的経緯

そもそも、「坐」は、いつ頃から原因の意味を表すようになったのか。景虎鉦「関于“停車坐愛楓林晩”之“坐”」（『紅河学院学報』第12巻第3期、2014）は、「坐」が動詞の「すわる」という意味から原因を意味する機能語へと変化した経緯について次のように述べる。「坐」は『説文解字』土部に「𦰩、止也。從土、從留省。土、所止也、此与畱同意、𦰩、古文坐」とあり、もともとは跪坐（ひざまづいてすわる）ということを意味していた。その後に派生義が生じて、たとえば漢代には『漢書』卷四十八賈誼伝に「古者大臣有坐不廉而廢者（古は大臣の不廉に坐して廢せらるる者有り）」とあるように、「罪を得る」または「訴訟する」という文脈で、原因を表す意味が生じ、それは三国、六朝以降になると『三国志』卷二十八魏書・諸葛誕伝の「誕麾下数百人、坐不降被斬（誕の麾下数百人、降らざるに坐して斬せらる）」のように、「降伏しない」という、罪や過失ではない行為も目的語に取るようになる。ただ、その行為が悪い結果を引き起こすという点は変わらない。

さらに時代が下ると、「坐」の機能語への変化が進み、『玉台新詠』日出東南隅行「来婦相怨怒、但坐觀羅敷（帰り来たりて相い怨怒するは、但だ羅敷を觀るに坐るなり）」、梁・王筠「春日詩」「幽閨多怨思、停織坐嬌春（幽閨に怨思多く、織るを停むるは嬌春に坐る）」、杜牧「山行」等の用例が現れて、唐代で前置詞の機能が定着したと解く。但し景氏は、この用法が唐代以降も「悪い結果を引き起こす」という機能を有したのかについては触れていない。また王筠の詩は、「織るを停めて嬌春に坐す」という、女性が艶やかな春景色とは裏腹に、機織りの手を止めてじっともの思いに沈む様子をいうのではなかろうか。

(2) 張相『詩詞曲語辭滙釈』とその後

張相『滙釈』は、前掲の明清詩の解釈に基づくのか定かではないが、「山行」の「坐」を「猶因

也；為也」と述べて原因の意味と見なした。今一度『滙釈』を示すと、「山行」について「言為愛看紅葉而停車也」と解説し、その他には「陌上桑」の「歸來相怨怒、但坐觀羅敷」、蘇軾「約公挾飲、是日大風」の「曉來頗風塵暗天、我思其由豈坐慳」や、それ以後の金代までの用例を挙げる。

これ以後、張相の「因る」説は非常な影響を及ぼした。試みに杜牧作品の主要な注釈書を見ると、王景霓『杜牧及其作品』（時代文芸出版社、1985）の「坐」は「因為」、周易韜『杜牧詩選』（遠流出版事業股份公司、1988）に「我停下車來、是因為愛這楓林的暮景。坐：因為。」とあり、朱碧蓮『杜牧選集』（上海古籍出版社、1995）、張松輝『新訳杜牧詩文集』（三民書局、2002）、曹中孚『杜牧詩賞析』（広東人民出版社、2003）の「坐」の注釈も「因」、胡可先『煙籠寒水月籠沙 杜牧卷』（河南文芸出版社、2002）も「因為；由于」、呉在慶『杜牧集繫年校注』（中華書局、2008）、『杜牧詩文鑑賞辞典』（上海辞書出版社、2016）も「因為」といったように、総じて「坐」を原因の意味と解説している。ただ、ごく少数だが、張厚余解評『杜牧集』（山西古籍出版社、2004）は「停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花」の二句について「登呀登、爬呀爬、爬得累了、便在一片楓林辺停了下来坐着歇息一会儿。此時…（略）…一説“坐”、意為“因為”（登って、登って、疲れたので、楓林の辺りで車から降りて、座って一休みする。するとこの時…（略）…一説に「坐」は「原因」の意味ともいう）」と解説しており、座って一息つくという文字通りの意味と捉えるようである。

その他、辞典・字典の類を見ても、『辞海』¹²や『漢語大字典』¹³、『漢語大詞典』¹⁴、『王力古漢語字典』¹⁵はもとより、近年刊行された、たとえば劉堅・江藍生主編『唐五代語言詞典』（上海教育出版社、1997）も「坐」の「⑧因為」に「山行」を挙げ、白維国『近代漢語詞典』（上海教育出版社、2015）も「坐」の「⑤因；為」に「山行」他を挙げ、『全唐詩詞語通釈』（安徽大学出版社、2017）「坐」の「⑦因為；由于」も「山行」を挙げるといように、現在まで「坐」の原因の意味には「山行」を挙げることが定着化している。

なお、日本では珍しく「因る」の解釈をとる川合康三『新編中国名詩選』（岩波文庫、2015）は、「車を停めて坐って愛す 楓林の晩るを」と訓じ、「車を止め、そして楓樹の林が日暮れてゆくのを愛でる。」と訳している。「坐」の語釈の項では「坐」は日本では「そぞろに」と訓読され、なんととはなしに、の意に解されるが、中国では「由なり、因なり」と説明されるのに従う。車を停めて「そうして」といった意味。」という。しかし「そして」では原因の意味が訳出されていないように思われる¹⁶。

(3) 原因説への反論

しかし、この「坐」を原因の意味とする説には反論がある。

徐靖方・聞国新「關於〈停車坐愛楓林晚〉」（『語文教学』1957年第6期）は、「坐」をゆったりとした気持ちで「坐着（すわって）」との意味であると説く。そして原因説への反論に、まず、「坐」が原因の意味を表す用例は古典文学中に極めて少ないという。徐氏は、唐詩の用例では「坐」の後ろに動詞がつく用法は多いが、たとえば沈佺期「有所思」（『全唐詩』巻95）「坐看長夏晚、秋月生¹⁷羅帷」や王維「終南別業」（『全唐詩』巻126）「行到水窮處、坐看雲起時」等は、杜牧とそれほど時代が離れていない詩人の用例だが「ために」という意味はない、沈佺期「有所思」の「坐看長夏晚」と「山行」の「坐愛楓林晚」は構造が似ているが、「有所思」の「坐」を「ために」と解釈すると全く意味が通らない、という。

また他の理由に、「ために」という意味の場合、第三句は主従文の主句が「停車」になって「その晩秋の楓林を愛するが為に、停車したのである」あるいは「停車したのは楓林の晩を愛する為である」となる、そうすると続く第四句「霜葉は二月の花よりも紅なり」と意味が繋がらないという。以上の指摘には説得力がある。徐氏の言うとおり、『滙釈』及び主な辞典類の「坐」の原因の意味の項には、唐詩では「山行」一詩のみが挙げられているのである。

また、陳一凡「“坐愛”通行注釈辨」(『江蘇師院学報』1981年第4期)も「坐」は「坐着(すわったままで)」の意味と論じる。陳氏の説の要点を述べると、「坐」が原因の意味を表す用法は古くからあるが、皆な「坐」の後ろにつく目的語によって良くない結果に到る、つまり「為…受累(…のために累を受ける)」、「受…的累(…の累を受ける)」という構造を持っており、この点において「坐」は「因」及び「為」という語と似て非なるのである、『滙釈』が引く用例も、「山行」と蘇軾「十二月初到惠州」を除けば皆なこのパターンに該当するという。

さらに陳氏は、原因の意味を表す場合、杜甫の「丈人山」(『全唐詩』巻219)に「為愛丈人山、丹梯近幽意(丈人山を愛するが為なり、丹梯 幽意に近し)」というように「為愛」と詠じれば良いのであり、杜牧が「山行」に敢えて特殊な「坐」を用いる必要は無い、という。

その他、周家庭「“坐愛”義應為“深愛”」(『漢字文化』2003年第1期)も、『史記』巻九十五夏侯嬰列伝「嬰坐高祖繫歳余、掠笞数百(嬰 高祖に坐して繋がること歳余にして、掠笞せらるること数百なり)」等の例を挙げて、「坐」が原因を意味する用法には、主体がそれにより不快な結果に到るというパターンがあるので、「山行」には当てはまらないという。この点は、陳一凡氏が既に指摘していることである。

なお、劉静「“坐”の訓の論議に加わる」(『漢文教室』185号、1999)は、「そぞろ」説と「因る」説とを比較して、「因る」説が正しいと論じている。劉氏は、「坐」が副詞の「おのずから」の意味でも前置詞の「因る」でも文法上問題は無いので、どちらなのかは前後の文脈から判断するほかはない、従者に車を停めるよう命じたのは杜牧であり、それは楓林の景色を愛でるためなのだから、「因る」が正しいとする。しかし高橋良行氏が「詩の表現(解釈)としては、あえて使役動詞として従者を登場させて解釈しなくても何ら不都合はなく、絶対的根拠とはなりがたい¹⁸⁾」と反論する通り、それだけでは「因る」の根拠にはならない。

以上の諸説を踏まえると、「山行」の「坐」を原因の意味と解するのは適切ではないと思われる。

3. そぞろに・すずろに

次に、日本で主流をなす「そぞろに」という訓及び解釈については、これまで向嶋成美氏¹⁹⁾、高橋良行氏²⁰⁾、古田島洋介氏²¹⁾の論文で既に詳しく論じられているが、今少しく触れておきたい。

荻生徂徠『校訂訓詁示蒙』²²⁾(1715)巻四「坐」の項によれば、「坐」を「そぞろ」とよむようになったのは、鮑照「蕪城賦」(『文選』巻十一)の「孤蓬自振、驚沙坐飛」の「坐」について、李善が「無故而飛(故無くして飛ぶ)」と注したことに由来するという。徂徠は続けて、「坐」の意味を「何ノ故モナク、子細モナク、メツタニ覚ヘズ、左様ニナリユクナリ」と解説し、その例に「山行」を引いている。同様に、たとえば雪心素隱『三体詩素隱抄』²³⁾(1637)に、「サテ心ガ。ナニトナク。ソ、ロニ。此ノ紅楓ニウツリタル」といい、河北景楨『助辞鶴』²⁴⁾(1786)巻之五「坐」にも「山行」

を引いて「コレハ何心ナキ上ヲ主トス」との解説が見える。それにより、江戸・館柳湾点『樊川詩集』(1817)²⁵も「坐ニ愛ス」と訓じている。

その他、上述の意味とは異なる「落ち着いて」、「ゆるやかに」との説も見られる。たとえば松本慎(愚山)『訳文須知』²⁶(1808)巻三「ソゾロ」の項は、「ソゾロトオチツキテキルナリ」と解説して「山行」を引く。釈清潭『三体詩』²⁷も、訓読は「そぞろに」とするが、「人家の有るに依て、我の車を停むる所以なり(略)坐を古来「ソゾロニ」と訓す、何の意なるを知らずと雖も、緩の意味に解したるならん、亦妨げず」と解説する。「坐」を「ゆるやか」とするのに加えて、停車したのは人家が有ったためとするのは、何焯及び王文濡(本稿第1節(2)に前出)と同じで、それまでの日本では稀な解釈と思われる。

実は、向嶋成美「「坐」の訓について」に言及される通り、『類聚名義抄』、『新撰字鏡』、『色葉字類抄』には「坐」に「ソゾロ」の訓は見えないが、観智院本の『類聚名義抄』²⁸法中には「ヨル、ヨリテ」とある。以後、時代が下って、釈大典は『詩語解』²⁹(1763)巻之下「坐」に「停車 楓林ノ色ヲ愛スルニ坐ル」と訓じ(『詩家推敲』³⁰[1799]巻之上「坐」も同じ)、『文語解』³¹(1772)巻之三「坐ヨル」の項に「コノ字事ニツミセラルノ義ヨリシテ為ノ意ニ用ルコトアリ」といった。また三宅橘園『助語審象』³²(1817)巻ノ上「坐」でも、「キナガラ」と「ヨル」という二つの訓を記している。つまり、『滙釈』より遙か以前から、日本で「山行」の「坐」を原因の意味と捉える説があったわけである。

しかし日本では、主として「そぞろに」の訓が継承された。向嶋氏はその理由を、『文選』李善注の影響とは別に「断定的なもののいいを避け、感覚的に流れがちな日本人の性情に相応しい読みであったように思われてならない」といい、反対に中国では「自然と」の意味では解さない理由を「一つには、心の積極的な動きを表す「愛」という動詞が、「自然」を意味する副詞の「自」とは結びつきにくいとする意識によるものかと想像される」と指摘するのは、非常に的を射たものと思われる。

ところで、以上の説を網羅詳述し最も詳細な分析を行ってきた高橋良行氏は、「広義の「そぞろに」説」³³を唱える。それは「自然に・おのずから・何となく・じっくりと・深くといった「自」及びその派生義的な方向、いわば広義の「自」であるといい、「仮に訓読次元で「そぞろに」と訓じた場合でも、解釈次元では、何気なく、何とはなく、というよりはむしろ、もっと深く、没我的な状態として解釈するべきである。その意味では龍譽の「真成(マメヤカニ)」や張相の分類する「坐、甚辞、猶深也、殊也」に近いといえよう」というものである。

そこで次に、龍譽の説と張相『滙釈』坐(六)「甚辞、猶深也；殊也」を検討したい。

4. 深く・じっと

龍譽の『絶句抄』(天正十一年〔1583〕写本、足利学校版、尊経閣文庫蔵)は、「山行」の第三・四句について次のようにいう。

三四句ハ停_{マメヤカニ}車トハ 真 成楓葉ノ霜ニ染タルヲ夕陽之時分見レハ二月ノ花ヨリモ紅ニシテ面白キト云心也。生トハ真_{マメ}成ニト云心也。

ここでは「坐」ではなく「生」と記しているが、横に「坐トハ」との書き直しが見られる。龍譽は「坐」を「真成（マメヤカニ）」と解説する。「まめやかかなり」とは、心がこもっている、誠実であるとの意味であり、龍譽はじっくりと、とくと楓樹を觀賞するとの意味に捉えたのだろう。ただこの説は、月舟寿桂『三体詩幻雲抄』³⁴（1536）、塩瀬宗和『三体詩絶句抄』³⁵（1620）、『三体詩素隠鈔』といった主な抄物には見えず、以後もとくに省みられなかったようである。しかし近年になってから、松枝茂夫「漢文の翻訳について」（『言語生活』1962年6月号、のち『中国文学のたのしみ』岩波書店、1998所収）が「そぞろに」を読みくせによる誤読であると否定して、「深く、しみじみと、といった意味に解すべきであろう」と述べた。同様に矢島美都子・宇野直人『詩Ⅲ』³⁶も、「坐ろに」と訓じてはいるが、「坐」の語釈に「しみじみと。じっくりと。対象に心を奪われたようす。「何となく、わけもなく」と解するものが多いが、従い難い」といい、通釈では「たそがれ時の紅葉林にしみじみと見とれる」と訳している。同書の補説の項ではこの点について、「坐」とは本来土の上に人が二人向き合ってすわることを指す会意文字なので、おちついた感覚が根底にあり、「何となく、わけもなく」という不安定な、捉えどころの無い感覚よりも、「しみじみと、じっと」という集中的で安定した感覚を第一義とすべきであろう」という。加えて、わざわざ車を停めて見たということは強い興味があつてのことで、愛という字は対象への相当の関心を示す語である、と解説している。

また松浦友久・植木久行『杜牧詩選』³⁷も「坐ろに」と訓ずるものの、「夕陽に映える楓樹の林の美しさに、われ知らずじっと見入る」と通釈を記し、「坐愛」の語釈には「突然、眼前に現れた風景の美しさに心を奪われ、我を忘れてじっと見入る情景。詩中の「坐」は、必ずしも坐ることではなく、じっと動かないこと、じっとしたまま何かに集中するさまを表わす」と説く。両書の解釈に従うならば、「坐ろに」との訓は誤解を生じやすい。むしろ「坐して」と音で読むか、「坐りて」^{ふか}「坐く」等といった、意味を生かした訓を付す方が良いのではないか。

次に『滙釈』の用例を見ていきたい。『滙釈』坐（六）「甚辞、猶深也；殊也」の項は、用例にたとえば九齡「感遇十二首」其一（『全唐詩』巻47）「誰知林棲者、聞風坐相悦」を挙げて「坐相悦、猶云深相悦也」といい、李白「贈宣城宇文太守兼呈崔侍御」（『全唐詩』巻171）「蹉跎復來歸、憂恨坐相煎」に「坐相煎、猶云殊相逼也」、孟浩然「同張明府清鏡歎」（『全唐詩』巻159）「愁來試取照、坐歎生白髮」に「坐歎、猶云深歎也」、武元衡「八月十五酬從兄常望月有懷」（『全唐詩』巻316）「坐愛圓景滿、況茲秋夜長」に「坐愛、猶云深愛或殊愛也」などと解説する。この武元衡の詩に「坐愛圓景滿」とあることが、「深く」説を主張する論者に指摘されることになった。

たとえば、前出の周家庭「“坐愛”義應為“深愛”」では、周氏は「深い」という意味が「山行」の詩境により適切であり、かつ唐宋の詩に用例が多いとして、『滙釈』の引く用例と、徐仁甫『広釈詞』「坐一殊」の項に引く、梁・何遜「南還道中送贈劉諮議別詩」「夫君日高興、為樂坐驕奢」及び梁・王筠「俠客篇」「俠客趨名利、劍氣坐相矜」の二首を挙げる。また、『滙釈』に武元衡の詩の「坐愛圓景滿」を「坐愛、猶云深愛或殊愛也」と解説することから、杜牧より前に「坐愛」で「深く愛する」を意味する用法が現れていると述べる。

しかし周氏の論は、用例を列挙するのみで、肝腎の「山行」については分析が浅く説得力に欠ける。それに対し、前出の王建勇「“停車坐愛楓林晚”的“坐”」は丁寧な分析を行っている。王氏の論の概要は次のようである。まず「坐」の程度副詞の用法は、唐宋期になると増加するとして、『滙

『全唐詩』の挙げる用例以外の、駱賓王「西行別東台詳正學士」(『全唐詩』卷79)「意氣坐相親、関河別故人」、李白「古風」其27(『全唐詩』卷161)「常恐碧草晚、坐泣秋風寒」、杜甫「戲寄崔評事表姪蘇五表弟韋大少府諸姪」(『全唐詩』卷231)「高樓憶疏豁、秋興坐氣氲」、白居易「寄李十一建」(『全唐詩』卷428)「豈不思命駕、吏職坐相縈」その他を挙げる。

そして以上の例と『滙釈』の用例とをあわせると、程度副詞の用法には①、坐+動詞／形容詞(心理を表す動詞・形容詞)、坐+惆悵、恨、愛など、②、坐+相+動詞／形容詞(感情の動きを表す動詞・形容詞)、坐+相親、相求など——という二つのパターンがあり、「山行」の「愛」はこの①の例に属するという。

また「坐愛」という語で、坐が「深く」を意味する用例は多いといい、孟郊「送淡公十二首」其二(『全唐詩』卷379)「坐愛青草上、意含滄海浜」(本稿第7節に後述)の他に、宋の夏竦「和太師相公秋興十首」其六(『全宋詩』卷161)「沈沈池閣乍涼天、坐愛蓮薰夜不眠」、韓維「穎橋會曼叔坐中寫呈」(『全宋詩』卷423)「坐愛溫爐密、歡從濁酒斟」、孔武仲「苦寒」(『全宋詩』卷885)「晨風獵獵卷書堂、坐愛松筠耐雪霜」等の例を挙げて、「山行」の構造と用法は以上の詩と同じであるという。

加えて王氏は、唐宋期によく用いられた「最愛」(杜甫「遣悶戲呈路十九曹長」(『全唐詩』卷234)「惟吾最愛清狂客」など)という語を「山行」に用いても問題無いが、「坐」は中古では上声、「最」は去声になり、杜牧は唐・釈処忠『元和韻譜』に「厲而拳(厲しくして挙ぐ)」という上声の「最」ではなく、「清而遠(清らかで遠い)」という去声の「坐」を用いたのだろうと論じる。

以上のように、王氏が『滙釈』以外の用例を多く挙げる点は説得力があるが、中には違う解釈が成り立つ例も見受けられる。たとえば白居易「寄李十一建」の「豈不思命駕、吏職坐相縈」は「豈に駕を命ぜんことを思わざらんや、吏職^{まさ}坐に相い^{まと}縈う」と読み、「坐」を「正に」との意味で解しても良いだろう。また、李白「古風」其27「常恐碧草晚、坐泣秋風寒」の「坐」について、王氏は「常」と互文なので「常に」の意味であると述べているが、「常に」と「深く、殊に」を同じ意味と捉えて良いのだろうか。

また、王氏が挙げる「坐愛」の唐詩の例が孟郊の詩一首というのは物足りなく、加えて孟郊と宋の三首の詩はみな、「すわったままで」あるいは「じっとして」と解しても良いと思われる。韻に関しては更なる検討が必要である。

以上の矢島・宇野氏、松浦・植木氏の解説は説得力があり、「深く」「じっと」の意味は最も「山行」に適するように思われる。

次に、「坐」を本義の動詞「すわる」とする解釈について検討したい。

5. すわったままで・座禅して

第1節(2)に掲げた清・王文濡『唐詩評注読本』巻四には、「偶然停車小憩、坐看楓葉(偶然にして車を停めて小しく憩い、坐して楓葉を見る)」とあった。この坐は「すわって」の意味だろう。日本の岡白駒『助辞訳通』³⁸(1762)巻下も「坐」を「イナガラ」と読み、「車を停めて坐ながら愛す楓林の晩」とは「車ヲオリズ但車ヲ停テ看賞スル」とのことだと説いている。

前出の徐靖方・聞国新「関於〈停車坐愛楓林晩〉」及び陳一凡「“坐愛”通行注釈辨」は、車中で

見ているとまではいわないが、すわって楓樹を見ると説く。

徐氏は、「坐」は「行坐」の「坐（すわる）」、「坐着（すわって）」の意味であり、車を走らせてさっさと花を見るのではなく、「心平気和不慌不忙（落ち着いてのんびりとした気持ち）」で楓樹を觀賞するということだという。この意味であれば「停車」は「坐愛楓林晩」にかかり、「愛する」が句の中心となる。つまり、車を停めて、すわって、觀賞するという流れを持つことになるという。

一方、陳氏は、まず唐詩の「坐愛」の用例には、①梁銓「聞百舌鳥」（『全唐詩』巻202）「坐愛時褰幌、行藏或駐車」、②元稹「贈双文」（『全唐詩』巻422）「有時還暫笑、閑坐愛無憀」、③武元衡「八月十五酬從兄常望月有懷」「坐愛円景満、況茲秋夜長」（前出）の三首があるといい、①と②の用例は「すわる」の意味、③の例は「すわって」または「深く」の意味に解釈できるとする。ただし実際には『全唐詩』中に「坐愛」の用例が他にもあるので、後述したい。

さらに陳氏は、「坐」が「ために」の意味ならば単に「停車」した理由の説明に過ぎないが、「すわって」といってこそ、杜牧が美しい風景に我を忘れてじっと觀賞する様子が表されることになるという。

近年では、ドイツの中国文学者 Wolfgang Kubin 氏（中国語の表記は顧彬）がインタビューで「坐」を「仏教意識の下での座禅」と表現して中国で注目を浴びた³⁹。Kubin 氏は「山行」を、中国文人の自然観における伝統的な悲秋の意識を超越して、新たな境地に踏みいったものと評価した上で次のように語る——唐朝以後、文人の自然観の価値は「悲秋意識」から「愁」に変わった。「愁い」と宗教にまつわる情緒及び体験は関係する。「停車坐愛楓林晩、霜葉紅于二月花」の二句は宗教への理解を内包しており、「坐愛」は即ち心を落ち着けて静座する、座禅の意味である。というのは、杜牧は友人とよく寺廟で会っており、寺廟を詠じた詩「題宣州開元寺水閣」、「題揚州禪智寺」（ともに『樊川文集』巻三）等があるからである。この「山行」も、もしかして寺を通りかかって車を降り、そこで座禅し（て楓樹を目にした）のかもしれない——。

この Kubin 氏の説に従う李金坤「“停車坐愛楓林晩”之“坐”意釐正」（『江海学刊』2008 年第 6 期）も、中晩唐の仏教と道教への信仰熱が高まり、「坐忘」・「坐禅」が流行していた時代において、「山行」には、杜牧が晩年に仏・道を受容し世俗を超越するための実践、つまり「座禅」が反映されており⁴⁰、王維「終南別業」の「坐看雲起時（坐して雲の起こる時を見る）」と山行の「坐愛楓林晩」は委曲同工の妙であると述べる⁴¹。

Kubin 氏のいうように「山行」が寺の詩という発想は興味深い、詩中に寺を想起させる語はなく、飛躍しているように思われる。本詩には、山下に広がる俗世を離れた、清らかな情趣といったものがあるが、中心に詠じられるのは霜に染まった楓樹の美しさであろう。王維の詩の「坐」と杜牧の「坐」を比較することは意義があると思われるが、更なる検討を要する⁴²。

以上、「坐」の主な解釈を検討してきた。次に、杜牧作品の「坐」について考えてみたい。

6. 「秋夕」の「坐看牽牛織女星」

問題は、現存する杜牧の詩集に「坐愛」の用例がないことである。「坐」の語であれば、たとえば「池州送孟遲先輩」（『樊川文集』巻一）に「寺樓最驚軒、坐送飛鳥沒（寺樓 最も驚き軒、坐して送る飛鳥の沒するを）」というのは、じっとすわって飛ぶ鳥が彼方に消えゆくのを見送ったとの意味で、

総じて動詞の用法である。

ただし「坐看」という語ならば、『樊川外集』所収の「秋夕」詩中に見える。

紅燭秋光冷画屏　紅燭の秋光　画屏に冷やかに
 輕羅小扇撲流螢　輕羅の小扇　流螢を撲つ
 瑤階夜色涼如水　瑤階の夜色　涼　水の如し
 坐看牽牛織女星　坐して看る　牽牛　織女星

この詩は、寵愛されることのない宮女が嘆きのうちに秋の夜を過ごすという宮怨詩の名作で、第三・四句では「宮中の石段を照らす夜の光は、水のように冷たく、宮女はじっとすわったまま、牽牛と織女星を見つめ続ける」という。ここでは宮女が石段にすわって夜空を見上げる様子をいうと思われ、「坐」は動詞の意味である⁴³。すわってじっと見続けるのが「坐看」であるから、山行の「坐愛」も同じくすわったままじっと楓樹を愛で、観賞するのであろう。ゆえに、杜牧は「最愛楓林晩」ではなく「坐愛楓林晩」と詠じたのではなかろうか。

ただ、この詩の「坐」の字については、朝鮮刻本『樊川文集夾注』、清・馮集梧『樊川詩集注』はともに「坐看」に作るが、馮集梧が「一作臥」と注するように「臥看」に作る版本も存在し、明・陸時雍『唐詩鏡』卷五十は「坐看不若臥看佳（「坐看」は「臥看」の佳きに若かず）」と比較して「臥看」の方が良いと評している。加えて当詩は、王建的集にも「宮詞」の題で収められていたが、当詩を杜牧の詩と見なして、それが王建的集に混入したとする説（宋・胡仔『苕溪漁隱叢話後集』卷十四、明・楊慎『升庵詩話』卷二）がある一方で、王建的詩とみる説（宋・周紫芝『竹坡詩話』）もあり、混乱が多い。

最後に、「坐愛」という表現が杜牧の時代にどのように用いられていたのかを検討したい。

7. 唐詩の「坐愛」

「山行」の他に『全唐詩』（中華書局、1960）に収める「坐愛」の用例は、文字の異同がある詩も含めると以下の九首である。

①、梁鋹「聞百舌鳥」（『全唐詩』卷202）

百舌聞他郡、間関媚物華。　百舌　他郡に聞こえ、間関　物華に媚ぶ。
 斂形藏一葉、分響出千花。　形を斂めて一葉に藏れ、響きを分かちて千花に出づ。
 坐看時褰幌、行藏或駐車。　坐して愛すれば時に幌を褰げ、行藏　或いは車を駐む。
 不須応独感、三載已辞家。　須く応に独り感ずべからず、三載　已に家を辞せり。

梁鋹は『全唐詩』に天宝年間（742～756）の人とある。陳一凡氏は「すわる」、高橋良行氏は「広義の「自」」の意味と解する。「坐愛時褰幌」は、百舌鳥の鳴き声をじっと聞いていて、時には姿を見ようととばりをかかげるといい、「行藏或駐車」とは、「行藏」は世に出て道を行うことと、隠遁して才能を隠すこと（『論語』述而篇）を意味するので、仕官と隠遁のどちらを選ぶか迷っている

様子である。従って「坐愛」は「じっと鳴き声を聞いて楽しむ」という意味と考える。

②、武元衡「八月十五酬従兄常望月有懷」(『全唐詩』卷316)

坐愛^い円景満、況茲秋夜長。 坐して愛す 円景の満つるを、況んや茲の秋夜長し。
寒光生露草、夕韻出風篁。 寒光 露草に生じ、夕韻 風篁に出づ。
地遠驚金奏、天高失雁行。 地遠くして金奏に驚き、天高くして雁行失す。
如何北樓望、不得共池塘。 北樓に望むも、池塘を共にするを得ざるを如何せん。

陳貽焮主編『増訂注釈全唐詩』(文化芸術出版社、2001)によれば、武元衡が西川節度使の任にあった時の作で、従兄とは太常卿の武少儀のことという。張相『滙釈』は「深く」の例に引き(周家庭氏・王建勇氏も従う)、陳氏は「すわって」または「深く」の両方に解せるとし、高橋氏は「広義の「自」」とする。筆者は、すわってじっくりと満月を觀賞するとの意味と考える。

③、孟郊「送淡公十二首」其二(『全唐詩』卷379)

坐愛^い青草上、意含滄海浜。 坐して愛す 青草の上、意は含む 滄海の浜。
渺渺独見水、悠悠不問人。 渺渺として独り水を見、悠悠として人を問わず。
鏡浪洗手緑、剗花入心春。 鏡浪 手を洗う緑、剗花 心に入る春。
雖然防外触、無奈饒衣新。 外触を防ぐと^{いへど}雖然も、衣の新たなること饒きを奈んともする無し。
行当訳文字、慰此吟殷勤。 行当に文字を訳さんとせば、此を慰むるに吟ずること殷勤ならん。

華忱之・喻学才『孟郊詩集校注』(人民文学出版社、1995)によれば、本詩は元和七年から九年(812～814)の間、孟郊が洛陽で、越中に帰郷する詩僧の淡然に贈ったものという。「坐愛青草上、意含滄海浜」について同『校注』は「言東野身雖在嵩雒、心実常念越中」と注し、陳延傑『孟東野詩注』(新文豊出版、1979)も「此詩意謂思越」という。つまり、孟郊は洛陽に在るが、心は帰郷する淡然を思っているということである。「坐」の字は本詩の第一首に「常於冷竹坐、相語道意冲」とあり、いつも二人は音楽を楽しみ、また仏道を語ったとの意味である。また第七首には「伊洛氣味薄、江湖文章多。坐縁江湖岸、意識鮮明波」とある。「坐」と「意」の対句は「坐愛青草上、意含滄海浜」と同じで、「体は～にあり、心は…にある」という構造からすれば、「坐愛」の「坐」はすわる、またはある場所にいるという意味と考えられる。高橋氏は「広義の「自」、王氏は「深く」と解する。

④、元稹「月三十韻」(『全唐詩』卷408)

蓂葉標新朔、霜豪引細輝。 蓂葉 新朔を標し、霜豪 細輝を引く。
白眉驚半隱、虹勢訝全微。 白眉 驚きて半ば隠れ、虹勢 訝かりて全て微かなり。
涼魄潭空洞、虛弓雁畏威。 涼魄 潭空の洞、虚弓 雁 威を畏る。
上弦何汲汲、佳色軋依依。 上弦 何ぞ汲汲たる、佳色 軋た依依たり。
綺幕殘燈斂、妝樓破鏡飛。 綺幕 殘燈を斂め、妝樓 破鏡 飛ぶ。
玲瓏穿竹樹、岑寂思幃幃。 玲瓏として竹樹を穿ち、岑寂として幃幃を思う。

坐愛規將合、行看望已幾。 坐して愛す規の將に合せんとするを、行^{たちま}看^{ちか} 望 已に幾からん。
絳河冰鑑朗、黃道玉輪巍。 絳河 冰鑑 朗らかにして、黃道 玉輪 ^{たか}巍し。

(以下略)

「坐愛規將合、行看望已幾月」の「規」はコンパス、規が合するとはコンパスが一周すること、「望」は満月の意味である。月の満月に近い様子をじっと愛で、観賞するという意味と考える。高橋氏は「広義の「自」」と解する。

⑤、元稹「贈双文」(『全唐詩』卷 422)

艷極翻含怨、憐多軋自嬌。 艷 極まりて翻って怨を含み、憐 多くして 軋^{なまめか}た自ら嬌し。
有時還暫笑、閑坐愛無憀。 時に還た暫く笑うこと有るも、閑かに坐して無憀を愛す。
暁月行看墮、春酥見欲消。 暁月 行^{たちま}看^{ちか}ち墮ち、春酥 消えんと欲するを見る。
何因肯垂手、不敢望回腰。 何に因りてか「垂手」を肯^{がえ}んじ、敢えて「回腰」を望まざらんや。

詩題の「双文」は崔鶯鶯のこと、卞孝萱の『元稹年譜』(齊魯出版社、1980)によれば、貞元十六年(800)に河中府にいた元稹が崔鶯鶯に贈った詩という。「閑坐」という語から、静かにすわってとの意味であろう。陳氏も「すわる」と解する。ただし明・馬元調『補遺』巻一には「閑坐更無聊」に作っており、「坐愛」ではない可能性がある。

⑥、白居易「玩松竹二首」其二(『全唐詩』卷 434)

坐愛前檐前、臥愛北窗北。 坐しては愛す 前檐の前、臥しては愛す 北窗の北。
窗竹多好風、檐松有嘉色。 窗竹に好風多く、檐松に嘉色有り。
幽懷一以合、俗念隨緣息。 幽懷 一に以て合し、俗念 縁に随いて息む。
在爾雖無情、於予即有得。 爾に在りては情無しと雖も、予に於ては即ち得る有り。
乃知性相近、不必動与植。 乃ち知る 性の相い近きは、必ずしも動と植とならざるを。

「坐」を下の句の「臥」と考えあわせると、「すわる」の意味が最も適切だろう。詩題に「玩松竹」とあるように、「すわっては正面の檐の前にある松を愛で、横になっては北側の窓辺の竹を愛でる」という。高橋氏も「座る」と解する。

⑦、歐陽詹「靈巖述旧」(『全唐詩補編』⁴⁴ 中)

不到靈岩又二年、重来風景尚依然。 靈岩に到らずして又た二年なり、重ねて来たれば風景尚お依然たり。
層巒迴出青霄外、倦鳥歸飛夕照辺。 層巒迴かに出づ 青霄の外、倦鳥は歸り飛ぶ 夕照の辺。
坐愛雲林泉石好、行尋煖谷野橋連。 坐しては愛す雲林泉石の好ろしきを、行きては尋ぬ煖谷に野橋の連ぬるを。
同遊不覺天將晚、暫借僧房一榻眠。 同に遊びて天の將に晚れんとするを覚え、暫く僧房を借りて一榻に眠ん。

欧陽詹は貞元八年（792）の進士（清・徐松撰、孟二冬補正『登科記考補正』北京燕山出版社、2003）。「坐愛」と「行尋」の対句からみて、「すわる」「とどまる」の意味と思われる。高橋氏は「広義の「自」」と説く。

⑧、劉威「題許子正処士新池」（『全唐詩』巻562）

坐愛風塵日已西、功成得与化工齊。 坐して風塵を愛せば日は已に西するも、功成して化工と齊しきを得ん。
巧分孤島思何遠、欲似五湖心易迷。 巧みに孤島を分かちて思うこと何ぞ遠からん、五湖に似んと欲するも 心迷い易し。
漸有野禽来試水、又憐春草自侵堤。 漸く野禽の来たりて水を試す有り、又た春草の自ら堤を侵すを憐れむ。
那堪更到芙蓉拆、晚夕香聯桃李蹊。 那ぞ堪えん 更に芙蓉の拆くに到るに、晚夕 香 聯なる桃李の蹊。

劉威は、会昌年間(841～846)の人(『全唐詩』)。「化工」は造化のたくみの意味。「坐愛風塵日已西、功成得与化工齊」は、世俗にまみれていると日々がすぐに過ぎていくが、処士の新池のような、天が作ったとおぼしき美しさにかなう功績を挙げたいとの意味であろうか。「坐」は、いながらにして、ただ何もせずといった意味のように思われる。高橋氏は「広義の「自」」と説く。

⑨、唐彦謙「叙別」（『全唐詩』巻671）

譙樓夜促蓮花漏、樹陰揺月蛟螭走。 譙樓 夜促す蓮花漏、樹陰 月揺れて蛟螭走る。
蟠拏対月吸深杯、月府清虚玉兔吼。 蟠拏する対月 深杯を吸い、月府 清虚として玉兔吼ゆ。
翠盤擘脯臙脂香、碧碗敲冰分蔗漿。 翠盤 脯を擘く臙脂の香、碧碗 氷を敲きて蔗漿を分かつ。
十載番思旧時事、好懷不似当年狂。 十載 番^{ひるがえ}りて旧時の事を思うに、好懷は当年の狂に似ず。
夜合花香開小院、坐愛凉風吹醉面。 夜合花香りて小院に開き、坐して愛す 凉風の醉面に吹くを。
酒中彈劍發清歌、白髮年来為愁變。 酒中に劍を弾じて 清歌を発するも、白髮 年来 愁いと為りて変ず。

唐彦謙は咸通の末に進士に応じたが十余年受からなかった。（『旧唐書』巻百九十下）とあり、杜牧にやや遅れる時代のひと。高橋氏は「広義の「自」」と解する。これは、夜の宴席で夜合花の香りを含んだ涼風が心地よく酔った顔に吹いてくるのを、じっと味わっている様子を詠じたものと思われ、すわってじっと心地よさを味わう、または深く愛するとの意味と考えられる。

以上の僅か九首のみでは不十分であるが、「坐愛」の語は主に、すわって、またはすわった状態のままで、じっと集中して何かを觀賞する、愛で味わうという意味のようである。従って「山行」の「停車坐愛楓林晚」も、車を停めて、すわって楓樹をじっくりと觀賞し、その美しさにしばし酔いしれたというのであろう。

おわりに

以上、「山行」の「停車坐愛楓林晩」の「坐」について、「因る」という原因を意味する前置詞の用法、「そぞろに」という「何となく」を意味する副詞の用法、「深く」「じっと」という副詞の用法、そして動詞の「すわったままで」「座禅して」という、およそ四種の解釈について検討してきた。

以上を踏まえると、「山行」の「坐」はすわったままじっと集中している様子を表し、「停車坐愛楓林晩」とは「車を停めて坐して愛す楓林の晩」と訓じ、「車を停めて、すわったままじっと暮れ方の楓樹の林の美しさに見とれている」という、対象物に集中して、時間が経過していく状態を表すと考えられる。この点は「秋夕」の「坐看」と同じで、また対象となる物に意識を集中させている状態は、「深く」にも通じている。故に、松浦友久・植木久行『杜牧詩選』に「必ずしも坐ることではなく、じっと動かないこと、じっとしたまま何かに集中するさまを表す」と解説する通りなのだが、「秋夕」及び他の唐詩の用例と合わせて検討すると、「すわる」という動作及びすわっているという状態にも、焦点を当てて解する必要があるように思われる。今後も新たな角度から、新しい解釈が論じられる可能性もあり、更なる検討が必要であろう。

ただ、「前言」に触れたとおり、日本では殆どの注釈書が一様に「そぞろに」と訓じているが、解釈はそれぞれ異なっており、むしろ「そぞろに」の意味と乖離している。訓と意味とが同じでなければ、訓は飾りになってしまう。今後は、日本の伝統的訓読やよみくせが現代日本語の意味と隔たっている場合、意味を生かした訓を付していく必要があると思われる。

【付記】

資料の収集に際しては、早稲田大学高橋良行教授のご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。

本稿は科学研究費基盤研究C「唐詩における異読の包括的研究」(16K02582、平成28年度～31年度、代表者東京学芸大学佐藤正光教授)の助成を受けたものである。

- 1 主要な先行研究に、坂田新「和漢比較と漢和比較」(『和漢比較文学研究の構想』汲古書院、1986所収)、高橋良行「杜牧「山行」詩における「坐」字の解釈について」(『愛知淑徳大学論集』第11号、1986)、松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』(大修館書店、1987)所収「山行」の項、「再び杜牧「山行」詩における「坐」字の解釈について—劉静説の検討—」(早稲田大学教育学部『学術研究(外国語・外国文学編)』第50号、2002)、向嶋成美「「坐」の訓について」(『漢文教室』第171号、1992。後に修正して『漢詩のことは』大修館書店、1998年所収)、古田島洋介「杜牧「山行」詩—「坐」字再考—」(『東アジア比較文化研究』第1号、2002)がある。
- 2 市野沢寅雄『杜牧』(中国詩人選7、集英社版コンパクトブックス、1967)。
- 3 前野直彬『唐代詩集』(中国古典文学大系、平凡社、1970)は「車を止めて眺めあかぬ楓林の日ぐれどき」という。
- 4 村上哲見『三体詩』(新訂中国古典選、朝日新聞社、1966)は「車をとめてのんびりと紅葉林の夕暮れをたのしむ」という。
- 5 田部井文雄・高木重俊『漢詩』(漢文名作選三、大修館書店、1984)は「山かごとめて、そのままうっとりと、からかえでの林の夕暮れをながめる」という。
- 6 矢島美都子・宇野直人『詩Ⅲ』(研究資料漢文学第五巻、明治書院、1993)は「(乗って来た)車を停め、たそがれ時の紅葉林にしみじみと見とれる」という。また石川忠久『漢詩をよむ 杜牧100選』(NHKライブラリー、2004)も「車を止めさせて、しみじみと夕暮れの楓林の景色を愛でながめた」という。
- 7 松浦友久・植木久行編訳『杜牧詩選』(岩波文庫、2004)は「車を停め、夕陽に映える楓樹の林の美しさに、

われ知らずじっと見入る」という。

- 8 以上の諸説については、注1所掲古田島論文を参照。また渡部英喜「杜牧「山行」詩小考—その解釈をめぐつて—」（『日本文学会誌』第16号、2004）は「坐」以外の語について論じたものだが、多数の注釈書における解釈の違いを検討しており参考になる。
- 9 杜牧の詩文を引用する場合は、『樊川文集』（上海古籍出版社、1978）による。
- 10 植木久行『唐詩歳時記—四季と風俗』（明治書院、1980）に従う。
- 11 小川昭一『中国の名詩鑑賞7 晩唐』（明治書院、1976）。
- 12 『辞海』1999年版彩図本（上海辞書出版社、1999）は「由于：為着」といい「陌上桑」と「山行」を引く。
- 13 『漢語大字典』縮印本（四川辞書出版社、1993）は「因為、由于」といい「山行」その他を引く。
- 14 『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社、1995）は「因為、由于」といい『史記』白起王翦列伝、「山行」その他を引く。
- 15 『王力古漢語字典』（中華書局、2000）は「因為、由於」として「陌上桑」と「山行」を引く。
- 16 横山伊勢雄『唐詩の鑑賞 珠玉の百首選』（ぎょうせい、1978）は「そぞろに」と読んで「車を停め、われ知らず夕陽に映える楓の林の美しさに見とれる」と訳しているが、「中国では「因」と同じとして「車を停めるのは楓林の晩を愛するに坐る」と解釈する。」といい、この解に従うべきであると解説する。
- 17 『全唐詩』は「照」に作る。
- 18 注1所掲「再び杜牧「山行」詩における「坐」字の解釈について—劉静説の検討—」。
- 19 注1所掲論文。
- 20 注1所掲論文。
- 21 注1所掲論文。
- 22 『漢語文典叢書』（汲古書院、1979）第一卷所収。
- 23 中田祝夫編『抄物大系 三体詩素隠抄』（勉誠社、1977）。
- 24 『漢語文典叢書』（汲古書院、1979）第二卷所収。
- 25 『和刻本漢詩集成 唐詩』（汲古書院、1974 - 1975）第十輯所収、江戸萬笈堂刊本。
- 26 『漢語文典叢書』（汲古書院、1980）第六卷所収。
- 27 国訳漢文大成『三体詩』（国民文庫刊行会、1921）。
- 28 正宗敦夫編纂校訂『類聚名義抄』（風間書房、1975）。
- 29 『漢語文典叢書』（汲古書院、1979）第一卷所収。
- 30 『漢語文典叢書』（汲古書院、1979）第一卷所収。
- 31 『漢語文典叢書』（汲古書院、1979）第一卷所収。
- 32 『漢語文典叢書』（汲古書院、1979）第二卷所収。
- 33 注1所掲「再び杜牧「山行」詩における「坐」字の解釈について—劉静説の検討—」本論及び補説の項。
- 34 中田祝夫編『抄物大系 三体詩幻雲抄』（勉誠社、1977）。
- 35 京都大学所蔵デジタルコレクション収録。
- 36 注6所掲書。
- 37 注7所掲書。
- 38 『漢語文典叢書』（汲古書院、1979）第一卷所収。
- 39 薛曉源「理解与阐释の張力—顧彬教授訪談録」（『文芸研究』2005年第9期）、及び陶文鵬・陳才智「“我喜歡中国古典意象詩歌”—德国漢学家顧彬訪談録」（『文学遺産』2007年第2期）。
- 40 清・馮集梧『樊川詩集注』（上海古籍出版社、1962）所収「樊川集遺収詩補録」の「行經廬山東林寺」詩に「方趨上国期干祿、未得空堂學座禪」とあるが、当詩は許渾の元・祝徳子訂正『増広音注唐鄧州刺史丁卯詩集』続補にも収められており、杜牧のオリジナルでは無い可能性が高い。
- 41 その他、趙銀芳「神思遠翔《山行》中—經典文本《山行》之重讀—」（『名作欣賞』2013年18期）は、「坐」は原因の意味というのが一般的解釈であると前置きした上で、Kubin氏の「座禪」説を評価するが、その是非を論じることは避けたいというにとどめている。
- 42 石川忠久「杜牧「山行」詩試論—超俗世界を詠う系譜—」（内山知也博士古稀記念会『中国文人論集』、明治書院、1997所収）は「山行」が王維「鹿柴」を換骨奪胎したものと論じ、陶淵明、謝靈運から宋之間、王維へと

繋がる俗世と画する清らかな境地が「山行」に継承されたと論じている。

- 43 陳一凡「“坐愛” 通行注釈辨」は、原因説への反証に、本詩の「坐」を「ために」と解すると文意が通らないという点を挙げている。
- 44 陳尚君輯校『全唐詩補編』（中華書局、1992）。